修士論文要旨
2011　年 1 月

大学生の自己愛と精神的健康についての一考察

－共感性・対人ストレスとの関連について－

指導　　中村延江教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
209J4003
深宮　郁織

目次

第１章　問題と目的 ･･･ 2

第２章　方法 ･･･ 2

第３章　結果と考察･･･ 2

第１章　問題と目的

多くの研究者が、自己愛的で自己中心的な人間が若者を中心に増えていることを指摘しており、自己愛が現代人の心理と行動の特徴を理解する上で有益かつ、不可欠な概念だと認識を示している（小此木,1992、小渕、2003)。

自己愛とは、「自己を愛の対象にすること」である。自己愛は青年期に高まるといわれ、また、青年期は、アイデンティティの獲得という課題達成につまずくとその後のライフサイクル各期における健康問題へと発展しやすい時期であるといわれている。青年期の自己愛に関する研究は様々あるが、最近では、Gabbard（1994）のいう、自己愛の２つのサブタイプ（敏感性自己愛と誇大性自己愛）を考慮した研究がある。しかし、被験者の群分方法は様々であり、今一度検討する必要があると思われる。そこで、本研究では、自己愛の２つのサブタイプを踏まえ、大学生における自己愛の特徴が精神的健康にどのように影響しているのかについて検討し、更に、青年期における重要な発達課題である対人関係（人間関係）に焦点をおき、対人関係に関係する諸要因である、共感性と対人ストレスを交えて、自己愛と精神的健康との関係を検討する。

第２章　方法

2010 年４月から 2010 年７月にかけて、首都圏にある大学に通う大学生（18 歳～23 歳）201 名（男性 36 名、女性 165 名、平均年齢 19.71 歳；SD＝1.062）を対象に調査を実施した。なお、調査は質問紙形式であり、授業時間の前後に著者が直接手渡しによる配布を行い、後日回収した。

質問紙は、フェイスシートと以下の４つの尺度から構成した。①自己愛的人格項目群（相沢,2002)：自己愛傾向に関する尺度で 48 項目 5 件法。②共感経験尺度改訂版（角田,1994)：過去の経験にもとづいて個人の共感性のタイプを評価するための尺度で 20 項目 7 件法。③対人ストレスイベント尺度（橋本,1997)：ストレスの中でも対人関係に起因するストレスを測定する尺度で 30 項目 4 件法。④The General Health Questionnaire28 （GHQ28：中川・大坊,1996；1985）：D.P.Goldberg（1979）によって開発された The General Health Questionnaire（精神健康調査票）の邦訳版を短縮した尺度で 28 項目 4 件法。

第３章　結果と考察

本研究では、まず、敏感性自己愛と精神的健康（GHQ得点）との間に、弱い正の相関がみられた（r.=.143,p<.01）が、誇大性自己愛と精神的健康（GHQ得点）との間には相関が見られなかった（r.=.143,p<.05)。また、自己愛のサブタイプと精神的健康（GHQ得点）との散布図（図2、図3）を視認すると、どちらの散布図も直線的関数になっていた。そのため、以後の分析においては、自己愛の群分けは、自己愛の中間型を含めない分け方で検討を進めていくこととした。

次に、敏感性自己愛に関しては、共感性（r=.238,p<.01)、対人ストレスイベント（r=.495,p<.01)、GHQ 得点（r=.385,p<.01)、ぞれぞれに相関がみられた。また、分散分析では、敏感性自己愛の高群と低群において、共感性（F（1,197）＝10.773,p<.01)、対人ストレスイベント（F（１,197）＝10.528,p<.01)、GHQ 得点（F（１,197）＝19.122,p<.01）それぞれにおいて差がみられた。このことから、対象の大学生において、①敏感性自己愛

の傾向が高い大学生の方が低い大学生よりも、共感性が高いこと、②敏感性自己愛の傾向が高い大学生の方が低い大学生よりも、日々の生活の中で対人関係においてストレスとなるような出来事（イベント）を多く体験していると感じていること、③敏感性自己愛の傾向が高い大学生の方が低い大学生よりも、精神的健康が保てていないと感じていることが分かった。

一方、誇大性自己愛に関しては、共感性にのみ相関がみられ（$r=.214, p<.01$）、分散分析では、誇大性自己愛の高群と低群において各尺度に差が見られなかった。現代の青年の対人関係をよく保つために必要なスキルである共感性は誇大性自己愛の特徴をもつ者であっても、必要であることが考えられた。しかし、それは、自分と他者との共通点があった際には共感的に振舞うが、その行動は稀であると推察された。また、誇大性自己愛傾向者のいう共感性は、他者反応を遮断した結果、自分と他者の反応が同じだと感じ、それを自分は共感性があると感じているのだろうと推察された。

最後に、共感性や対人ストレスイベントは自己愛と精神的健康との関係での修飾変数ではないことが分かった。しかし、上述した内容から、敏感性自己愛の程度が高い人程、共感性の程度が高まり、それにより対人ストレスイベントの経験量が高まり、最終的に精神的健康度が低くなるという一連の流れが推察された。さらに、敏感性自己愛や精神的健康と共感性や対人ストレスイベントが相関を示していることを踏まえると、共感性や対人ストレスイベントが媒介変数である可能性も考えられる。今後、媒介変数を含めた他の視点から検討していくことが望まれる。また、本研究では、被験者の男女比に大きな差が見られるので、その点に関しても再検討が望まれる。

参考文献

相沢直樹(2002).自己相的人格における誇大特性と過敏特性　教育心理学研究,50,215-224

American Psychiatric Association (2000). Diagnostic and statistical manual of mental disorders 4th edition, Text Revision（高橋三郎、大野裕、染矢俊幸（訳）(2002). DSM-IV-TR　精神疾患の分類と診断の手引, 医学書院）

Freud.S (1914). “Einführung des narizißmus”, Jahrbuchder Psychoanalyse, 7 （懸田克躬（訳）（1977). ナルチシズム入門　改訂版フロイト全集第5巻　性欲論　日本教文社）

Gabbard, G.O (1994). Psyacodynamic psyachiatry in clinical practice : The　DSM－Ⅳ edition.Washington,D.C. : American Psyachiatric　Press（館哲郎（監訳）(1997). 精神力動的精神医学―その臨床実践〔DSM-Ⅳ晩版〕　③臨床編;Ⅱ軸障害　岩崎学術出版）

橋本剛(1997).大学生における対人ストレスイベント分類の試み　社会心理学研究 13(1), 64-75

角田豊(1994).共感経験尺度改訂版(EESR)の作成と共感性の類型化の試み　教育心理学研究, 42（２）,193-200

角田豊(1998).共感性と自己愛傾向の関連　共感経験尺度(EESR)と自己愛人格目録(NPI)を用いて　心理臨床学研究, 16（２）, 129-137

Kernberg.O (2003). Pathological narcissism and narcissistic personality　disorder : theoretical background and diagnostic classification, In E.F.Ronningstam (Ed.) Disoreders of Narcissism : Daignostic,Clinical,and　empirical Imprications. Washington,D.C. : American Psyachiatric Press.
（佐野信也監訳（2003). 自己愛の障害　診断的、臨床的、経験的意義　金剛出版）

Kohut.H(1971).The Analysis of the Self,A Systematic Approach to the Psyachoanalystic Treatment of Narcissistic Personality Disorder. Madison, International Universities Press Inc.

小西瑞穂・山田尚登・佐藤豪（2008). 自己愛人格障害についての素因-ストレスモデルによる検討

中川泰彬・大坊郁夫（1996、1985). 日本版GHQ精神健康調査票（手引き）　日本文化化学社

小此木啓吾（1992). 自己愛的人間　ちくま学芸文庫

小渕憲一（2003). 見たされない自己愛―現代人の心理と対人葛藤　ちくま新書

大石史博（1990). ナルシシズムの心理学研究（２）－共感性、および対人関係との関係について－　臨床教育心理学研究, 16（１）

小塩真司（2004). 自己愛の青年心理学　ナカニシヤ出版

小塩真司(2005).自己愛傾向と対人ネガティブライフイベントに対する反応　中部大学人文学部研究論文集, 14,183-190

鈴原利恵・末田啓二（2009). 自己愛傾向についての一考察―共感性・精神的健康との関連―神戸親和女子大学大学院研究紀要, ５,93-104